

不登校に対するイメージ変容に関する研究

文珠紀久野

要 約

大学生対象に不登校生徒から不登校経験に関する話を聴くことによって、不登校に対するイメージや理解の変容への影響を検討する目的で実施した。その結果、話を聴く前は、不登校に対して否定的なイメージが強かったが、話を聴くことによって理解的、共感的へと変容し、イメージもポジティブへと変容することが見いだされた。不登校の原因に対して、話を聴く前は友人関係形成能力や家庭の問題と捉えられがちであったが、話を聴いた後では、それらは減少することが見いだされた。

キーワード：不登校、イメージ内容、不登校体験談

<はじめに>

不登校は年々増加し、2000年度には134,000人と過去最高になったといわれている。学校離れに抜本的対策が見いだせない現状が報告されている(毎日新聞 2001)。そういった中でも、児童相談所はメンタルフレンド事業として、大学生を不登校児童宅へ派遣するという試みも行っている。

1995年度から当時の文部省はスクール・カウンセラーを学校現場に派遣し、いじめ・不登校対策への調査研究を開始した。(初等中等教育局 1995) スクール・カウンセラー制度が始まると共に、スクール・カウンセラーの活用に関する研究も多く見られるようになってきた(岡堂・平尾 1995a、岡堂・平尾 1995b、村山・山本 1995、大塚 1996、大塚・滝口 1998、倉光 1998)。

これらの研究においては、主としてスクール・カウンセラーや教師が如何に不登校生徒と関わり、学校状況に介入しながら学校内力動を変容させるかということに主眼がおかれている。つまり、大人が子どもである不登校生徒に働きかけることによって、不登校生徒の内的な心理状態や、行動面での変化がみられることが報告されている。学校内の人間関係への援助やコーディネートを行うことによる効果も検討されている。

しかし、日々不登校生徒と生活を共にしている

子どもたちが、不登校や不登校生徒に対し、どのような見方や関わりを持つかということによって、不登校生徒自身の感情や行動への影響は大きいとも考えられる。そういった点からの研究(文珠 1996 a)では、同世代の子どもは主として対人関係から不登校が生じていると見なしており、日頃から不登校生徒と関わっていない生徒ほど、不登校生徒を厳しく否定的な見方でとらえていることが示唆されている。

また、不登校生徒と学校生活を過ごしてきた大学生は、不登校に対し女子の方が男子よりも厳しい見方をしていること、不登校は怠けや学校への不適応、逃避であり、なんらかの精神的問題から生じているととらえられていることを見いだされている(文珠 1996 b)。

このような状況におかれた不登校生徒にとっては、学校へ復帰することはもちろん、地域社会で生活することに対しても困難感を持ち、さらに、強い自己否定感や卑屈感を抱かざるをえないと考えられる。

ところが、不登校生徒自身へのインタビューや面接調査から、不登校のきっかけは学校場面における人間関係に端を発し、友人のサポートや関わりが不登校解消への鍵であることが見いだされている。(文珠 1996 a) 実際に不登校生徒と関わ

(所 属)

山梨県立看護大学

(専攻分野)

臨床心理学

りのあった子どもほど不登校に対するイメージはよりポジティブであることも示唆されている。(文珠 1996b)

不登校イメージは実際の不登校生徒と関わることによって形成されると言うよりも、それぞれの人が内的に想像したことから生じるイメージであるとも考えられる。このようにした形成されたイメージは実際と異なることも多いために、不登校や不登校生徒への偏見にもつながっていくと考えられる。このことは、不登校に対してどのような見方をするかによって、不登校児や不登校生徒を抱えた家族の悩み・苦しみは違ってくると思われる。

そこで、実際に不登校生徒と接し、不登校生徒自身からの話を聴き、関わることによって、不登校イメージがどのように変容するか、また、不登校に対する見方がどのように変化するかを捉えることは、不登校に対する認識をただすことにもつながるのではないかと考えられ、本研究を実施した。

本研究では、不登校生徒から直接話を聴き、関わるのが不登校イメージ変容に与える影響を明らかにすることを目的として行った。

<方 法>

1. 被験者：大学生49名（女子46名 男子3名）

*研究への協力を了承した学生

2. 不登校生徒：2名（女子）

Aさん：中学1年次から中学3年次まで不登校、現在高校1年生

Bさん：小学4年から中学3年まで不登校、現在高校1年生

3. 調 査

・プレ調査

文珠(1996b)での不登校イメージに関する形容詞、不登校に対する認識、不登校の原因項目を含んだ調査用紙を使用して、被験者に集合調査を実施。

・ポスト調査

プレ調査で使った項目と同様の調査用紙を使用して、不登校生徒から話を聞いた後、集合

調査を実施。

・調査期日

プレ調査：2000年1月17日

ポスト調査：2000年1月24日

4. 不登校生徒の話

・2000年1月24日に2人がおのおの約30分ずつ自分の不登校経験を話し、その後、質疑を30分実施。

・不登校生徒の話の概要

二人の不登校生徒の話の内容は「不登校に至った経過、不登校のきっかけとその時の状況、不登校中の経過、不登校中の生活状況、親の関わり、教師の関わり、友人との関係、不登校である自分に対する思い、適応指導教室への通学、不登校状態の変化に影響したこと、高校進学への希望と準備、将来の希望、現在の高校生活の状況」である。

・不登校生徒への質問

不登校生徒の話を聴いた後の質疑での質問は「不登校中に考えていたこと、勉強の遅れに対する思い、学習状況、他の兄弟との関係、不登校中に登校したときの思いや状況、希望していた支援、他の不登校生徒へのメッセージ」であった。

<結 果>

1. プレ調査結果

① 不登校イメージ

表1に示すように不登校に対するイメージは、全体的にネガティブなイメージが強い。「不登校」は、対人関係において回避的、逃避的であると見なされているようである。

② 不登校に対する認識

不登校に対する認識状況を6段階評価で捉え、評定値1～3であるものを「低得点者」(否定的認識)、4～6のものを「高得点者」(肯定的認識)とした。

高得点者と低得点者間で有意に差がみられたイメージ項目は「訳の分からなさ一理解できる」認識に関しては、「まじめ」(高avg.39.3, 低avg.14.3)、「優しい」(高avg.32.1, 低avg.9.5)である。「同情の可否」認識では、「傷つきやすい」(高avg.90.5, 低avg.67.9)、「配慮的」(高avg.4.8, 低avg.25.0)、

表 1 不登校に対するイメージ (%)

項 目	pre	post	有意差
傷つきやすい	77.55	67.35	
内向的	65.31	14.29	*
孤立	63.27	14.29	*
おとなしい	57.14	4.08	*
人目を気にする	57.14	42.86	
神経質	57.14	24.49	*
友達作り下手	53.06	18.37	*
消極的	46.40	6.12	*
無口	44.90	2.04	*
まじめ	28.57	12.24	*
優しい	22.45	38.78	*
地味	20.41	2.04	*
融通がきかない	18.37	4.08	*
批判的	18.37	4.08	*
配慮的	16.33	6.12	
我慢強い	16.33	6.12	
几帳面	12.24	4.08	
自分中心	12.24	8.16	
思いやり深い	12.24	26.53	
自由	12.24	32.65	*
わがまま	10.20	2.04	
親切	10.20	12.24	
頑固	10.20	2.04	
変わっている	10.20	4.08	
自己主張的	8.16	10.20	
努力家	8.16	6.12	
論理的	8.16	2.04	
積極的	6.12	12.24	
衝動的	6.12	0.00	
柔軟	6.12	14.29	
好奇心旺盛	6.12	4.08	
文句が多い	6.12	0.00	
丁寧	4.08	8.16	
活動的	4.08	10.20	
寛容	4.08	6.12	
粗雑な	4.08	0.00	
冷静	4.08	6.12	
明朗	2.04	24.49	*
活発	2.04	16.33	*
元気	2.04	53.06	*
冗談がうまい	2.04	2.04	
おもしろい	2.04	22.45	*
外向的	2.04	16.33	*
自己顕示的	2.04	2.04	
キレやすい	2.04	0.00	
派手	2.04	0.00	
合理的	2.04	0.00	
理性的	2.04	2.04	
社交的	0.00	4.08	
落ち着きがない	0.00	0.00	
支配的	0.00	0.00	
リーダー的	0.00	2.04	
その他	8.16	2.04	

* p < .05

「共感の可否」認識では、“孤立”（高avg.54.3, 低avg.85.7），“傷つきやすさ”（高avg.71.4, 低avg.92.9）、「不登校に関する知識の多寡」に関しては、“神経質”（高avg.40.0, 低avg.59.1）である。

③ 不登校の原因

不登校になった原因としてみられていることは、表 2 に示すように、学校の問題（67.35%）や本人の問題（友人関係形成力の低下、63.27%、性格、59.18%）が大きいととらえられている。次に、教師の問題（48.98%）、親とのコミュニケーション不足（44.90%）が原因と見なされている。

しかし、地域の問題や不登校容認へと傾いている社会の問題といった社会問題から生じたこととはあまり考えられていない。また、本人の問題が原因と見なされがちではあるが、学力が不登校と関連するとみるのは、8.16%にすぎない。

表 2 不登校の原因

項 目	プレ	ポスト	有意差
学校の問題	67.35	71.43	
教師の関わりの問題	48.98	63.27	
本人の性格	59.18	53.06	
友人関係形成力の低下	63.27	38.78	*
本人の社会性	40.82	34.69	
社会の問題の反映	30.61	22.45	
生活の実体験不足	12.24	16.33	
家庭のしつけ	24.49	8.16	*
親とのコミュニケーション不足	44.90	8.16	*
不登校容認社会	8.16	8.16	
本人の学力	8.16	4.08	
過密スケジュール	12.24	4.08	
家庭内のトラブルの犠牲	32.65	0.00	
親からの愛情不足	20.41	0.00	
地域教育力低下	8.16	0.00	
その他	4.08	8.16	

* p < .05

2. ポスト調査結果

① 不登校イメージ

不登校生徒から話を聴き、討議を行った後での不登校イメージを表 1 に示す。「傷つきやすい」イメージは高率であるが、全体に不登校に対してはポジティブな見方である。

② 不登校の原因

不登校生徒の話を聴いた後、不登校に対する原

表3 プレ、ポストでの項目選択者の増減

順位	項 目	減少	項 目	増大
1	おとなしい	27	元気	26
2	内向的	27	明朗	12
3	孤立	25	優しい	11
4	消極的	22	おもしろい	11
5	無口	22	自由	11
6	友達作り下手	21	思いやり深い	10
7	神経質	20	活発	8
8	人目を気にする	14	傷つきやすい	7
9	傷つきやすい	12	外向的	7
10	まじめ	10	人目を気にする	6
11	地味	9	柔軟	6
12	几帳面	7	積極的	5
13	融通	7	友達作り下手	4
14	配慮的	7	自分	4
15	批判的	7	親切	4
16	自分	6	丁寧	4
17	我慢強い	6	活動的	4
18	変わっている	6	神経質	3
19	わがまま	5	配慮的	3
20	思いやり深い	5	自主的	3
21	頑固	5	内向的	2
22	親切	3	まじめ	2
23	優しい	3	好奇心	2
24	衝動的	3	冷静	2
25	柔軟	3	寛容	2
26	好奇心	3	社交的	2
27	文句	3	おとなしい	1
28	論理的	3	孤立	1
29	丁寧	2	消極的	1
30	外向的	2	無口	1
31	積極的	2	几帳面	1
32	自主的	2	我慢強い	1
33	粗雑	2	変わっている	1
34	努力	2	わがまま	1
35	冷静	2	頑固	1
36	明朗	1	努力	1
37	活発	1	冗談	1
38	元気	1	自己顕示的	1
39	冗談	1	理性的	1
40	おもしろい	1	リーダー的	1
41	活動的	1	地味	0
42	自己顕示的	1	融通	0
43	寛容	1	批判的	0
44	切れやすい	1	衝動的	0
45	自由	1	文句	0
46	派手	1	論理的	0
47	合理的	1	粗雑	0
48	理性的	1	切れやすい	0
49	社交的	0	派手	0
50	落ち着き	0	合理的	0
51	支配的	0	落ち着き	0
52	リーダー的	0	支配的	0

因とみなされる項目は(表2)、学校の問題(71.43%)や教師の問題(63.27%)が高率であり、本人の問題(性格、53.06%、友人関係形成力、38.78%、社会性、34.69%)がその次に続いている。

社会の問題(22.45%)や生活体験不足(16.33%)が原因であるとあげる人も見られる。

3. 不登校に対する意識の変容

① 不登校イメージ

不登校生徒の話を聴き、討議した後での不登校イメージは、大きな変化を見せている(表1)。「傷つきやすい」イメージは話を聴いた後でも変化がみられず、非常に高い率である。(プレ、77.55%、ポスト、67.35%)

変化がみられた項目は、「元気、自由、優しい、明朗、おもしろい、活発、外向的」のイメージが高くなり、「神経質、友達作り下手、孤立、内向的、まじめ、消極的、融通が利かない、おとなしい、批判的、無口、地味」といったイメージが減少している。

イメージ項目を選択した同一被験者の変化を表3に表す。プレで選択し、ポストで選択されなかった項目は、「おとなしい、内向的、孤立、消極的、無口、友達作り下手、神経質、人目を気にする、傷つきやすい」といった対人関係において回避的と見なされる項目や、「まじめ、地味、几帳面、融通が利かない」といったやや強迫的で完全癖的性格と見なされる項目がみられる。

反対にプレでは選択されず、ポストで選択された項目では「元気、明朗、優しい、おもしろい、活発、外向的、積極的、自由」といったエネルギーがあり、外に向かって表出されるイメージや、「思いやり深い、優しい」といった対人関係における配慮を指す「イメージ」がみられる。

② 不登校に対する認識の変化

表4に示すように、不登校への理解度(プレ avg. 3.41, ポスト avg. 4.45 $p<.05$)や興味度(プレ avg.4.59, ポスト avg.4.96 $p<.05$)が高くなり、同情(プレ avg. 3.27, ポスト avg.2.88 $p<.05$)や共感(プレ avg. 4.06, ポスト avg.4.53 $p<.05$)も高まっている。また、不登校生徒に関わりたという欲求も高くなり(プレ

表 4 プレ、ポストでの不登校認識

	理解的	援助的	同情できない	共感的	興味深さ	関わり欲求	不登校の知識	理解可能
プレ	3.41	4.24	3.27	4.06	4.59	4.08	2.10	
ポスト	4.45	4.59	2.88	4.53	4.96	4.96		4.69
有意差	*		*減少	*	*	*		

* p < .05

表 5 プレ、ポストでの項目選択者の増減（不登校の原因）

順位	原因項目	減少	原因項目	増大
1	親とのコミュニケーション不足	18	社会性	9
2	友人形成能力低下	16	学校	9
3	家庭内トラブル	16	教師の関わり	9
4	社会性	13	性格	6
5	性格	12	社会問題の反映	4
6	家庭のしつけ	10	実体験不足	4
7	愛情不足	10	友人形成能力低下	3
8	社会問題の反映	8	過密スケジュール	2
9	学校	7	不登校容認社会	2
10	過密スケジュール	6	家庭のしつけ	1
11	学力	4	学力	1
12	実体験不足	4	親とのコミュニケーション不足	0
13	地域の教育力低下	4	家庭内トラブル	0
14	教師の関わり	4	愛情不足	0
15	不登校容認社会	2	地域の教育力低下	0

avg. 4.08, ポスト avg.4.96 $p<.05$)、全体に不登校への好意的認識へと変容している。

③ 不登校の原因

不登校の原因と見なされる項目をみると（表2）、プレでは学校、教師が原因であると見なされることは強いが、親、本人の問題もかなり高率で原因としてあげられている。ポストでは、学校や教師の関わりの問題と、本人の性格や友人関係形成力、社会性の問題と見なされるように変化している。

また、同一の被験者における選択の変化をみると（表5）親との関係や本人の問題と見なす人は減少し、反対に社会の問題、学校や教師の問題を見なす人が増加している。

<考 察>

1. 不登校に対するイメージ

全国で約13万人にのぼる不登校生徒がいるといわれている昨今、小・中学校と学校生活を送ってくる中で、同学年に不登校生徒はかならず数人おり、同級生としてあるいは、友人として大なり小

なり関わってきたと思われる。しかしながら、不登校に関しての知識や理解は低いままにとどまっている。反面、興味を持ち、共感をもって関わりたいとも思っている。そういった中で、不登校に対してネガティブなイメージを持っており、そのイメージがあるために、気持ちの上で関わりを避けたい、あるいは自分の視野から不登校生徒を排除しようとする行動ともつながってしまっていると考えられる。

ところが、実際に不登校生徒と身近に接し、不登校生徒が実際にどのような状況で、なにを思い、どんな境遇で生活してきたかを詳細に聴き、自分たちが疑問に思っていることを投げかけ、応答される経験を通すことによって、不登校へのイメージを大きく変化させるようになる。

2 人の不登校生徒が共に、「不登校は自分を成長させる良い経験であった」と語ったように、不登校はその人にとってマイナスではなく、その人を変化成長させるといったポジティブな面を有していることや、不登校生徒は暗く回避的で逃避的

な生活を送っているわけではないことが理解されてくるようである。

また、不登校は本人の性格がその原因となっていてと見なす傾向が高い。その背景にあると思われる「暗い、内向的、神経質等」といった性格を表すイメージが、不登校生徒が対人関係を形成し、学校生活を元気に活動的に送ることに対して阻害要因となっていると見なしているようである。しかし、実際の不登校生徒は元気で明朗であり、活発で積極的な面も持っていて、それらが十分に発揮されないことが問題となっているのではないかと見なすように変化してくる。

2. 不登校生徒と直接に関わる体験の意味

直接体験を十分持たず、自分の狭い範囲内での推測を兼ねたイメージはどちらかといえばネガティブな方向で形成されてくる。ところが直接不登校生徒本人から話を聞き、共に経験を分かち合うことによって、自分のイメージの変容に影響を及ぼすようになる。

約90分程度の関わりではあるが、真剣に話を聞き、それを自分の中で消化させようと質問をすることによって、態度変容が生起すると考えられる。

話を聞いた学生の中には、その後、手紙の交換、メールのやりとりを継続しているとのことであり、直接の対人関係は、そこにいる人に対する見方を好意的に変容させるだけでなく、その人をもって代表される「不登校」そのものへの見方も変容させると考えられる。

<今後の課題>

現在不登校生徒は年々増加の一途をたどっている。不登校への理解を現小・中学生がさらに深め、理解的態度を獲得できることが、不登校生徒の心理的安定に一助となるのではないかと考えられる。そのためには、実際に不登校をしている生徒から直接話を聞くことができることが望ましいが、その実現はかなり困難と思われる。その代わりに、過去に不登校であり、現在はその人なりの道を選択し、歩んでいる人の話を聞くことにより、不登校イメージ変容が図れるかどうかを検討していくことも必要であると考えている。

<謝 辞>

自らの大変であった不登校体験を語ってくださった2人の元不登校生徒の方々と、今回の研究に協力してくださった、48名の学生に感謝申し上げます。

参考文献

- 倉光修 1998 臨床心理士のスクールカウンセリングーその活動とネットワーク 誠心書房
毎日新聞 2001年8月11日付
文珠紀久野 1996 a 不登校に関する研究ー中学生がみている不登校ー、UTY研究助成報告書
文珠紀久野 1996 b 「不登校」に関する研究ー大学生からみた不登校ー、山梨県立短期大学紀要 1巻、89-96
村山正治・山本和郎 1995 スクール・カウンセラーーその理論と展望 ミネルヴァ書房
岡堂哲雄・平尾美生子 1995 スクール・カウンセリング要請と理念 現代のエスプリ別冊 至文堂
岡堂哲雄・平尾美生子 1995 スクール・カウンセリング技法と実際 現代のエスプリ別冊 至文堂
大塚義孝 1996 スクール・カウンセラーの実際 こころの科学増刊 日本評論社
大塚義孝・滝口俊子 1998 臨床心理士のスクールカウンセリングーその沿革とコーディネーター 誠心書房

The study of substantial image on non-attendance at school

MONJU Kikuno

The aim of this study was for the university students to examine the effects of the understanding and the image on non-attendance at school, by speaking with the students who do not attend school about their experiences of non-attendance at school. Before speaking with the students who do not attend school, the image of non-attendance at school was generally negative. However, by speaking with them, it was consequently found that the image of non-attendance at school has been changed positively. This was because the initial negative image of non-attendance at school received the understanding and the sympathy of the university students'. In addition, it was often thought that the causes of non-attendance at school were due to the abilities of building up relationships between friends, and family problems. However, it was eventually found that this stereotype has also been changed after speaking with the truant students.

Key Words : Non-attendance at school, Substantial image, One's experience of non-attendance at school